

「図書館の約束」

○ 登場人物一覧

湯浅真帆 ゆあさまほ (31) 図書館司書

菅原透 すがわらとおる (45) 本の返却に来た男

河野仁美 かわのひとみ (42) 真帆の同僚

笹野静子 ささのしずこ (86) 移動図書館の利用者

○ 概要

南海トラフ地震が発生してから五年後、甚大な被害を受けた徳島県海陽町にようやく図書館が再建された。司書の真帆のもとへ、薄汚れた本を返しに男がやって来た。それは津波で行方不明になった男の妻が震災前に借りた本だった。その時小さな余震が起きた。真帆と男に蘇る震災の記憶。街の復興が進んでも、あの日の傷は癒えない。それでも、日常の小さな輝きを見つけながら、今日も真帆は人々のもとへ移動図書館車で本を届ける。

SE 軽快な音楽を鳴らしてやってくる

移動図書館車の走行音

真帆「どうぞ自由にご覧くださいーい」

SE 「図書館だ」「図書館来た」と集

まる子どもたちの賑やかな声

真帆「はいはい、順番ね。占いは左側の棚。

なぞなぞの本？ ごめーん次のとき持ってくるね。あ！静子さん、予約されてた
ガーデニングの本、届いてますよ！」

静子「真帆さん今日も元気ね」

真帆「晴れでも雨でも本が読めればいい日！」

静子「そうそう聞いたよ。新しい図書館、素敵な建物なんだってね」

真帆「そうなの！ ずっと仮設で狭かったでしょう。本もたくさん揃ったよ」

静子「そしたら、まつかぜ号はもう来んの？」

真帆「大丈夫、移動図書館は今まで通りよ！」

静子「ありがたいねえ。車もないし、年寄りにはこうして来てくれるのが助かるんよ」

真帆「そうだよね。でも新しい図書館も見に来て欲しいなあ」

静子「家もお店もみんな新しくなって、街が変わっていくねえ……」

真帆「……寂しい？」

静子「ん？……いいことよ」

真帆「今年は咲くかな、お庭の金木犀」

静子「そうねえ、挿し木をしてから五年って言うから、秋には咲くといいねえ」

真帆「楽しみだね！」

SE 図書館の自動扉が開く音

真帆M「徳島県の最南端、太平洋に面した小さな街、海陽町。私が働いているのは、この街に今はたった一つの図書館」

真帆「仁美さん、なあにその地図？」

仁美「来週から新しい運転手さん来るから」

真帆「ああ、まつかぜ号の」

仁美「ねえそれより、あそこ、あの人変なのよ。もう一時間くらい、ああやって入口でウロウロしてるの」

真帆M「図書館の入口で、黒い帽子を被った男の人がこちらの様子を窺っている」

仁美「誰か捜してるのかしら？」

真帆「んー、私、声掛けてみます！」

SE 自動扉が開く音

真帆「あのお……何かお困りですか？」

透「えっ！ あのと……いえ、すみません！」

真帆「はい？」

透「あ……本を、本を返したいんです！」

真帆「ああ、それなら、あちらの返却カウン

ターへどうぞ」

透「その、実は、少し長い間借りてまして」

真帆「延滞ですかー、気をつけてくださいね」

透「あの、それが……実は五年ほど」

真帆「え、ご、五年!？」

透「すみません!本当に申し訳ありません!」

真帆「ちょ、しっ、声大きいです!」

透「あ、すみません……」

真帆「まって、五年前って……」

透「はい、震災の前です」

真帆M「南海トラフ地震はいつか起きる、と

子供の頃から言われていた。それでも、

五年前のあの日まで、そのいつかが、本
当にやってくるなんて思わなかったんだ」

SE サイレンと大津波警報のアナウン

ス「大津波警報、津波が来ます。

速やかに高台に避難してください」

真帆「はあ、はあ、はあ……何、あれ……」

真帆 M 「必死に逃げた高台から見た光景を、
今でもはつきりと覚えてる。地震発生か
らたったの六分。沿岸に到達した津波は、
ゴーと唸り声をあげて黒い濁流となり、
車を家を街を飲み込んでいった。二十メ
ートルを超える大津波。透き通るような
青く美しい海は、もうそこにはなかった」

SE 瓦礫の中を歩く足音

仁美 「本当にここが図書館だよな？」

真帆 M 「海陽町に二つあった図書館はいずれ
も大きな被害を受けた。ほとんどの本が
流され、私たちは、ただ茫然と残された
泥だらけの本を集めた」

SE 鞆を弄って、本を取り出す音

透「この本、えっと、震災で僕は家も仕事も失くして、親戚のいる大阪へ移りました。それでこの本も返しそびれてしまっ

真帆「それを、どうして今になって？」

透「あんな目にあっただから、もうええか、って思っていました。ちよっと手放し難かったのもあるのかな……。あ、でも甥っ子に言われて、『借りたものは返さなあかん、図書館のお約束や』って」

真帆「しっかりしてますね、甥っ子さん」

透「子どもたちも守ってる当たり前のことだったのに。この本、弁償させてください」

真帆M「表紙には擦り傷、中には読みジワや染み。薄汚れたその本は、イギリスの作家が書いたミステリー小説の上巻だ」

真帆「あ！ それ、ラストが衝撃ですよね。」

透「僕はまだ読んでないんです、下巻」

真帆「え？」

透「だから真犯人も知りません」

真帆「読んでない？ 嘘でしょ？ そんなの

読書の、ううん人生半分損してますよ！」

透「はは、半分か……」

真帆「いいんですか？ 犯人の予想たぶん外

れてますよ？ いや間違はなく！」

透「ぷっ、あははは、参ったな」

真帆「あ、すみません、つい……」

透「妻がね、借りた本なんです」

SE 本のページを捲る音

透「『帰りに図書館に返してね』って、頼ま

れて、あの朝……」

真帆「え……」

SE 携帯のツイッターという話中音

透「何度電話しても繋がらない。あの日から

僕は、まだ、妻に会えていません」

真帆「あ、私……ごめんなさい……」

透「いえ、いいんです。ただ、続きを読んだら、僕だけが結末を知ってしまう。なんで僕だけが――」

SE 本棚がガタガタと揺れる音

透「地震か？」

真帆M「耳の奥で、あの音が鳴る。ゴーゴー」

真帆「（息荒く）じ、しん？……はあはあ」

透「(おま)大丈夫ですか？」

SE 激しい濁流と建物が壊れる音

真帆M「すぐそこに迫る黒い濁流。生ぬるい

風、誰かの叫び声、本についた泥の匂い」

透「大丈夫ですよ。小さな余震です。心配な

いですよ。大丈夫。大丈夫」

真帆「（呼吸が速く）はあはあはあはあはあ

透「ここに座って、ゆっくり息を吐きましょ

う、ふうー」

真帆「ふうー、ふうー……、ふうー……」

透「そうです、そのままゆっくり」

真帆「ふう……すみません、もう大丈夫です」

透「落ち着きましたか？ はあ、よかった」

真帆「もう慣れたと思ってたんですけど」

透「……慣れるわけないんだ」

真帆M「彼の左手が小刻みに震えていた。彼

は震えを包み込むように、拳をギュツと

握りしめた」

透「ずっとここに握ってるんです」

真帆M「何で僕だけが物語の結末を読めるの

か。何で僕だけが、助かったのか。住宅

や建物が再建されて、どんなに街の復興
が進んでも、ずっとそこにある、あの日」

透「ああ、えっと、実は僕、もう一度この街
に暮らせることになりました」

真帆「海陽町にですか？」

透「やっと仕事が見つかったので」

真帆「じゃあ、おかえりなさい、ですね」

透「ただいま、です。(照れて) はは……」

真帆「この本も。返却ありがとうございます」

透「……読んでみようかな、その小説の続き」

真帆「え？」

透「いやあ、そんなに面白いんなら、結末を
知らないなんて言ったら、妻にも怒られ
そうだから……いつか」

真帆「ちよっと、待っててください！」

透「はい？」

真帆「すぐ戻ります！　すぐ」

SE　小走りの足音

真帆「ええつと確かこの棚の……あつた！」

SE 小走りの足音

真帆「あの！ 利用者カード作りませんか？」

透「あ、その本！」

真帆「下巻です」

透「貸してくれるんですか？」

真帆「ここは町立図書館です。この町にお住

まいの方は、どなたでも利用できますよ」

透「はは、そっか」

真帆「ただし、返却期限は三週間後です。必ず、返しにきてくださいね！」

透「あ、はい！……でも大丈夫だと思います」

真帆「え？」

透「大阪で中型の免許とりました」

真帆「はい？……あ！」

透「来週から移動図書館車の運転手をさせて
いただく、菅原透です」

真帆「なんだ早く言ってくださいよ！」

透「僕も誰かに本を届けたいと思います」

SE 移動図書館車の走行音

真帆「キャラ弁の本乗せたっけな」

透「真帆さんが青色のカゴに入れてましたよ」

真帆「よかった。この前保育園のお母さんが

探してて、あ、窓開けてもいいですか？」

透「え、あ、はい」

SE 車の窓を開ける音

窓から吹き込む風の音

透「今、いい香りがしましたね」

真帆「ふふ、金木犀です」

SE 移動図書館車の走行音

到着を知らせる軽快な音楽が鳴る

(了)

○ 参考文献

徳島県海陽町『防災のしおり』（令和二年改訂版）

徳島県海陽町立図書館ホームページ

朝日新聞DIGITAL 南海トラフ地震の被害想定

https://www.asahi.com/special/nankai_trough/